

平成19年度第1回太平洋イワシ・アジ・サバ等長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
中央水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2007年8月～12月)のポイント

海況

潮岬以東の黒潮は、8～9月はB型流路、10～12月はC型流路となる。8月から蛇行の規模は大きくなり、期間中その規模が維持される。

沿岸水温は、潮岬以西が「平年並み」～「高め」、潮岬～犬吠埼が「平年並み」～「やや高め」で暖水波及時に「高め」、伊豆諸島南部海域がB型時に「高め」、C型時に「低め」で推移する。犬吠埼以北は「平年並み」～「高め」で推移する。ただし、親潮系冷水南下時に「極めて低め」となる。

※ 平年並み＝平年値±0.5℃程度、やや高め＝平年値+1.0℃程度、
高め＝平年値+1.5℃程度、低め＝平年値-1.5℃程度、
極めて低め＝平年値-2.5℃以上

漁況(来遊量予測)

マサバ・ゴマサバ太平洋系群

1、2歳魚は前年を下回り、3歳魚は上回る。
全体では下回る。

マアジ太平洋系群

海域により異なるが、全般に低調。

マイワシ太平洋系群

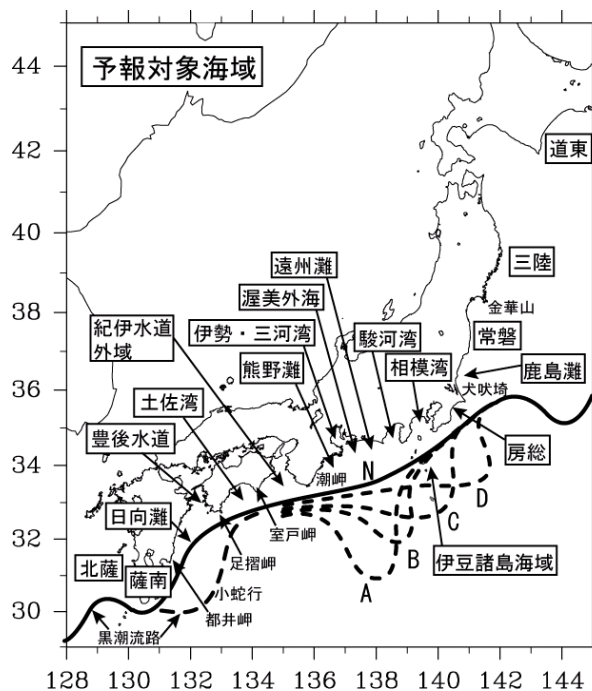
相模湾以西では、全体としては0歳魚主体に前年を上回る。房総以北では漁獲の主体となる1歳魚は前年を下回る。

カタクチイワシ太平洋系群

1歳魚は前年を下回るが0歳魚は前年を上回る。

ウルメイワシ太平洋系群

前年を上回る海域が多い。



問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班

担当：大隈、田中、佐藤

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/release/index.html>

独立行政法人水産総合研究センター 中央水産研究所 業務推進部

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://nrifs.fra.affrc.go.jp/>

参 画 機 関

北海道立釧路水産試験場	高知県水産試験場
北海道立函館水産試験場	愛媛県中予水産試験場
青森県水産総合研究センター	愛媛県水産試験場
岩手県水産技術センター	大分県農林水産研究センター 水産試験場
宮城県水産研究開発センター	宮崎県水産試験場
福島県水産試験場	鹿児島県水産技術開発センター
茨城県水産試験場	大阪府環境農林水産総合研究所 水産技術センター
千葉県水産総合研究センター	香川県水産試験場
東京都島しょ農林水産総合センター	北部太平洋まき網漁業協同組合連合
東京都島しょ農林水産総合センター 大島事業所 八丈事業所	社団法人 漁業情報サービスセンター
神奈川県水産技術センター	財団法人 日本鯨類研究所
神奈川県水産技術センター 相模湾試験場	気象庁 地球環境・海洋部 海洋気象情報室
静岡県水産技術研究所	海上保安庁 海洋情報部 環境調査課
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	水産庁 増殖推進部 漁場資源課 研究指導課
三重県科学技術振興センター 水産研究部	独立行政法人 水産総合研究センター 本部 業務企画部 開発調査センター 東北区水産研究所 中央水産研究所
和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場	
徳島県立農林水産総合技術支援センター 試験研究部 水産研究所	

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2007年8月～12月）

(1) 黒潮 （注：黒潮流型は図1を参照のこと。）

◎潮岬以西

- ・ 薩南海域の黒潮北縁は、屋久島南付近での変動が多く、11月に接岸傾向となる。
- ・ 黒潮は、期間を通して都井岬沖～足摺岬沖では接岸傾向、室戸岬沖～潮岬沖では離岸傾向で推移する。

◎潮岬以東

- ・ 黒潮は、8～9月はB型流路、10～12月はC型流路となる。8月から蛇行の規模は大きくなり、期間中その規模が維持される。
- ・ 野島埼沖の黒潮は、8～9月は接岸傾向、10～12月はやや離岸傾向となる。

(2) 薩南～房総沿岸域

- ・ 潮岬以西では、黒潮の離接岸に伴って沿岸域へ一時的に暖水が波及することがある。
- ・ 潮岬以東では、B型流路のとき、熊野灘～遠州灘は内側反流による暖水の影響を受けやすい。C型流路のとき、熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域は概ね冷水域に入る。ただし、伊豆諸島南部海域は蛇行北上部の変動に伴って昇温と降温を繰り返す。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 房総沖の黒潮の離接岸に伴って黒潮系暖水が沖合から沿岸域へ波及することがある。

(4) 沿岸水温

- ・ 潮岬以西は「平年並み」～「高め」で推移する。
- ・ 潮岬～犬吠埼は「平年並み」～「やや高め」で暖水波及時に「高め」で推移する。
- ・ 伊豆諸島南部海域はB型時に「高め」、C型時に「低め」で推移する。
- ・ 犬吠埼以北は「平年並み」～「高め」で推移する。ただし、親潮系冷水南下時に「極めて低め」となる。

※ 平年並み＝平年値±0.5℃程度、やや高め＝平年値+1.0℃程度、高め＝平年値+1.5℃程度、

低め＝平年値-1.5℃程度、極めて低め＝平年値-2.5℃程度

経過（2007年4月～7月） （注：経過は図2を参照のこと。）

(1) 黒潮

- ・ 3月下旬にB型流路からC型流路へ移行した後、4月は伊豆海嶺上で蛇行北上部がS字状に蛇行するC型流路をとった。
- ・ 4月前半、蛇行南端が31°N以南まで大きく離岸したが、4月後半には離岸規模が徐々に縮小した。
- ・ 5月、蛇行北上部が徐々に東進し、C型流路が継続した。
- ・ 6月上旬、潮岬沖を小蛇行が通過し、6月中旬には一時的にW字状の流路となった。
- ・ 6月後半、小蛇行の東進に伴って黒潮流路が大きく変化し、黒潮本流は八丈島付近を東へ流れるようになり、6月下旬には沖合の蛇行部が黒潮から切り離された。
- ・ 7月上旬、N型流路で推移した。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・4月、黒潮北縁は屋久島南付近の平均的な位置で推移した。
- ・5月、黒潮北縁は接岸傾向で推移した。
- ・6月、黒潮北縁は屋久島南付近の平均的な位置で推移した。
- ・7月上旬、黒潮北縁は屋久島の南に位置していた。

◎潮岬以西

- ・4月下旬、都井岬南東沖に小蛇行が形成され、5月中旬に足摺岬沖、6月上旬に潮岬沖を通過した。
- ・5月下旬、都井岬南東沖に出現した小蛇行は、6月中旬に足摺岬沖、7月上旬に潮岬沖を通過した。
- ・5月上旬と6月上旬、豊後水道外域で左旋環流の暖水波及が見られた。
- ・5月下旬と6月下旬、紀伊半島西岸で振り分け潮が発生し、紀伊水道外域へ暖水が波及した。

◎潮岬以東

- ・4月前半、紀伊半島東岸に沿って熊野灘へ暖水が流入し、小暖水渦を形成した。
- ・4月下旬、S字状蛇行の影響で、青ヶ島周辺が冷水域に入った。
- ・4月下旬～5月上旬、S字状蛇行に伴って伊豆諸島北部海域で暖水波及が見られた。
- ・6月上旬、小蛇行が潮岬沖を通過したのに伴って、黒潮の蛇行北上部が熊野灘へ流入し、6月中旬、遠州灘に暖水が波及した。
- ・6月下旬、蛇行北上部が三宅島を通り、伊豆諸島北部海域～相模湾に暖水波及が見られた。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・4月、近海の黒潮の北限緯度が平年に比べ南偏した。142～143° E 付近に強い北向きの暖水の流れが卓越し、常磐北部への親潮系冷水の南下を阻んだ。沿岸域に黒潮系暖水の波及があった。
- ・5月初旬、親潮系冷水が142° E 付近から常磐南部に差し込み、5月中旬には沿岸域に差し込んだ。5月下旬にかけて海域全体に大規模に親潮系冷水の差し込みがあった。黒潮の北限緯度は概ね平年並みで推移した。大洗沖の海域では黒潮系暖水の影響が期間を通して残った。
- ・6月、期間を通して常磐北部から常磐南部への南下流が卓越した。常磐南部沖には親潮系冷水が停滞した。黒潮の北限緯度は平年並みで推移した。6月初旬から犬吠埼へ接岸していた黒潮は6月下旬以降離岸した。
- ・7月上旬、常磐北部から常磐南部へ混合水が流入した。

現況(2007年7月23日現在)

(1) 黒潮

- ・黒潮はN型流路からB型流路へ移行した。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・黒潮北縁は屋久島の北に位置している。

◎潮岬以西

- ・黒潮は都井岬沖～足摺岬沖で「接岸」、室戸岬沖～潮岬沖で「やや離岸」している。

◎潮岬以東

- ・潮岬沖を通過した小蛇行は遠州灘沖の冷水域と合体し、その規模を拡大しつつある。
- ・伊豆諸島北部海域には黒潮系暖水が波及している。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・黒潮は犬吠埼沖を東方へ流去している。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に従った。

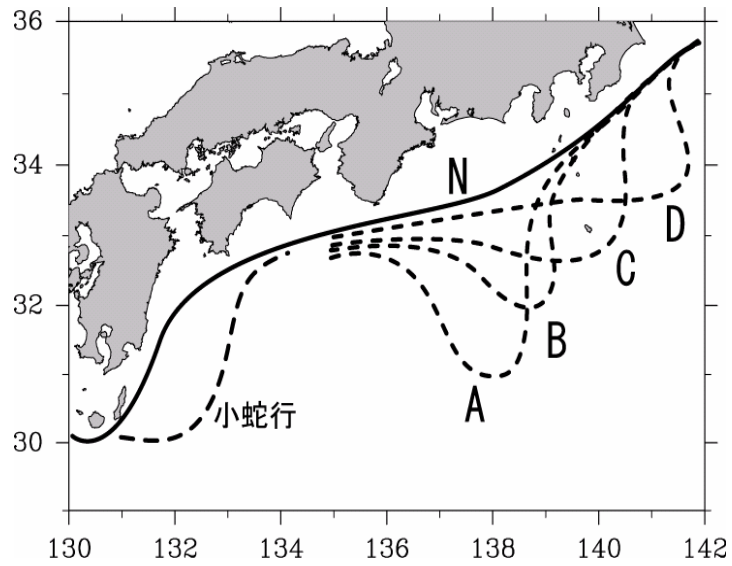


図1 黒潮流型の分類

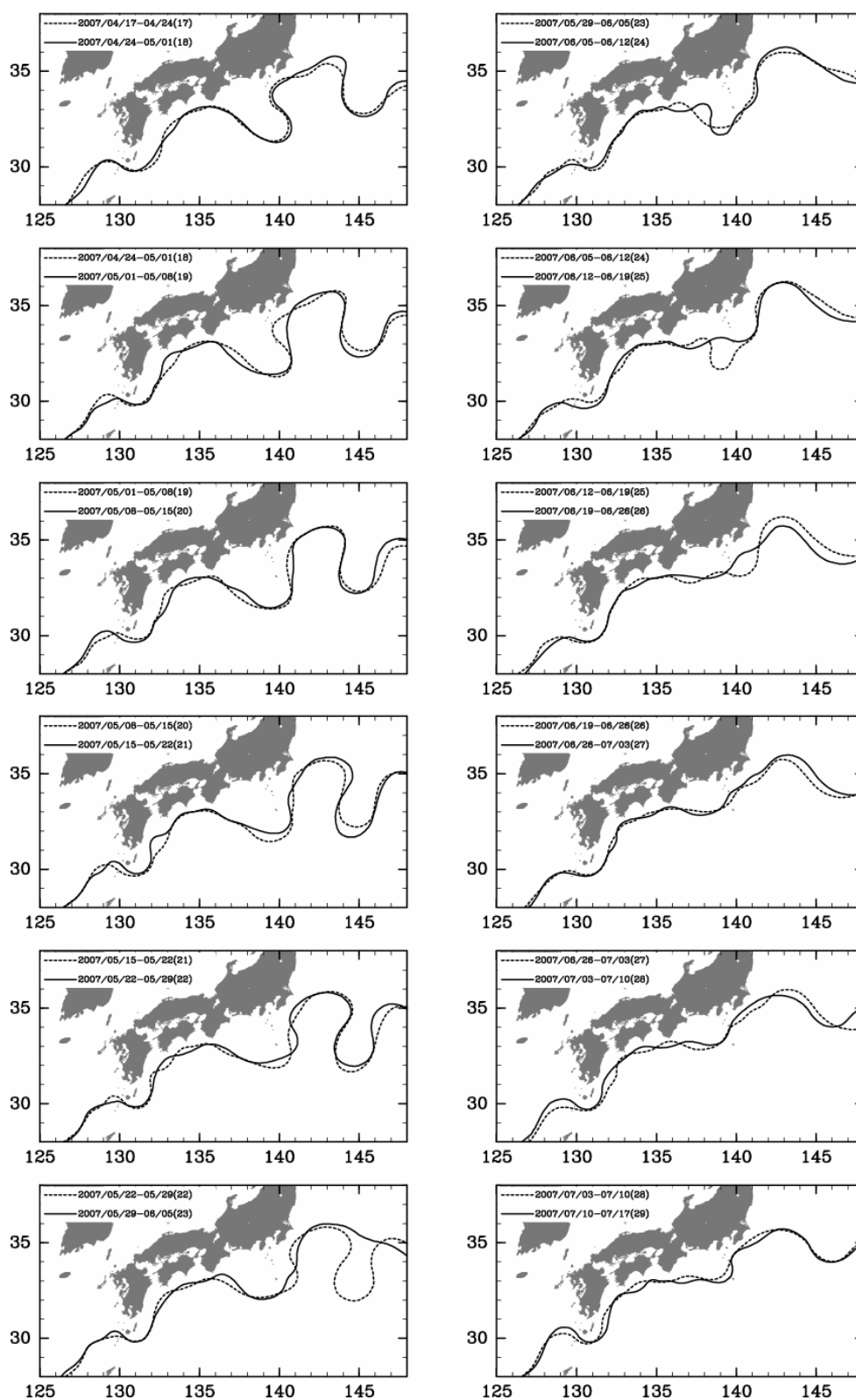


図2 黒潮流軸のパターン

(2007年4月~7月, 海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マサバおよびゴマサバ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し（2007（平成19）年8月～12月）

対象海域：薩南～豊後水道、紀伊水道外域、熊野灘、伊豆諸島周辺海域、犬吠～三陸海域

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、たもすくい

対象魚群：0歳魚（2007（平成19）年級群）、1歳魚（2006（平成18）年級群）、2歳魚（2005（平成17）年級群）、3歳（2004（平成16）年級群）以上。魚体の大きさは尾叉長で表示。年初に加齢。

1. 薩南～豊後水道（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ0歳魚は、薩南では前年並み、日向灘～豊後水道では上回る。1歳魚は前年同様低い水準。2歳魚は好調であった前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。4歳以上は少ない。サバ類全体としては薩南、豊後水道では前年を下回り、日向灘では上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、34 cm以下（0～2歳魚）が漁獲される。日向灘では35 cm前後（3歳魚）も多く漁獲される。期後半に20～25cmのマサバ（0歳魚）が混獲される。

2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ0歳魚は前年を上回る。1、2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。4歳以上は少ない。サバ類全体として前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、25～36 cm（1～3歳魚）が漁獲される。期後半には28 cm以下（0歳魚）も漁獲される。

3. 熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ0歳魚は前年を上回る。1、2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。4歳以上は少ない。サバ類全体としては前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは混獲程度。ゴマサバが主な漁獲対象となり、25～36 cm（1～3歳魚）が漁獲される。期後半には28 cm以下（0歳魚）が混じる。

4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ0歳魚は前年を上回る。1歳魚は前年同様低い水準。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。4歳以上は少ない。サバ類全体としては前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期を通じて三宅島および銭洲周辺が主漁場となる。

(3) 魚体：マサバは混獲程度。ゴマサバは30～37 cm（3歳魚）が主体となる。25～35 cm（1、2歳魚）が混じる。25 cm以下（0歳魚）も漁獲される。

5. 犬吠～三陸海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバ0歳魚は前年を上回る。1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。マサバとしては前年を下回る。ゴマサバ0歳魚は前年を上回る。1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。ゴマサバとしては前年を下回る。サバ類全体として前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：定置網は期を通じて漁獲される。まき網は、8月は三陸北部海域で漁場が形成される。9月には金華山周辺でも漁場が形成される。10月には三陸～常磐海域に漁場が広がる。11月は三陸～犬吠海域となるが、主漁場は常磐以南。12月には常磐～犬吠海域に漁場が形成され、犬吠海域が主漁場となる。

(3) 魚体：マサバは32～38 cm（3歳魚）主体に27～32 cm（2歳魚）、25～28 cm（1歳魚）が混じる。期後半に19～25 cm（0歳魚）が漁獲される。ゴマサバは35 cm前後（3歳魚）主体に期後半には25 cm以下（0歳魚）も漁獲される。

漁況の経過（2007（平成19）年1月～6月）および今後の見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マサバ

資源量は1990年以降依然として低い水準にあるが、加入量水準の高い2004年級群の発生により資源量は増加傾向にある。

2003年級群（4歳魚）以上の残存資源量は少ない。

2004年級群（3歳魚）は昨年時点では1992年級（28億尾）に準ずる加入量水準（24億尾）と評価されたが、その後道東～三陸～常磐海域において、2歳魚としては近年にない豊漁となった。これを受けて2007年2～3月に資源を再評価し、2004年級群の加入量水準が過小であったことを確認した。本年7月の評価では2004年級群の加入量は36億尾と1992年級群を上回る水準に上方修正された。現在の残存資源尾数は2.6億尾と、3歳魚としては近年にない高い水準である。

2005年級群（2歳魚）は、2005年5月の黒潮-親潮移行域中層トロール幼魚調査（中央水研・北水研）を除き、いずれの調査船調査でも漁獲状況が悪く、加入量水準の低い年級と評価された。漁業における漁獲状況も悪く、茨城水試による未成魚越冬群指数は177と、2001、2003年級群を上回るものの低い値となった。これらの結果を総合して推定された2005年級群の加入尾数は2.7億尾程度と、加入量水準の低い2001、2003年級群並みの水準と判断される。

2006年級群（1歳魚）は、調査船調査および漁業における漁獲状況がいずれも悪く、現在までの漁業による漁獲尾数も著しく少ない。本年4月以降まき網による操業自粛が行われ、従来漁獲が本格化する越冬期～北上期に操業がなかったことを考慮しても、その加入量水準は低いと考えられる。コホート解析では加入量は5千万尾程度と推定されており、2005年級群をさらに下回る水準と評価されている。

2007年級群（0歳魚）は、黒潮-親潮移行域中層トロール幼魚調査（中央水研・北水研）による加入量指数が12.1と、2004、2005年並みの高い値であった。東北水研による北西太平洋中層トロール資源調査（サンマ漁期前調査）から推定される推定資源尾数は105億尾（暫定値）と、2004年級群（64億尾）を上回った。茨城県の船曳網、千葉県定の定置網など沿岸域でも昨年、一昨年よりマサバ0歳魚の分布が多くみられているほか、釧路水試による流し網調査においても分布が確認されている。これらのことから2007年級群は2005、2006年級群より加入量水準は高いと考えられる。しかし発生後間もない現時点での調査結果に基づく評価は極めて不確実である。

(2) ゴマサバ

資源量は1996年級群の高い加入量水準によって増加し、2004年にピークに達した後、2005、2006年級群の加入量水準が低いため減少しているが依然高い水準にある。

2003年級群（4歳魚）以上の残存資源量は少ない。

2004年級群（3歳魚）はこれまで各地漁業の漁獲主体であり、近年の卓越年級群である1996年級群（推定加入尾数：17億尾）を上回る推定加入尾数27億尾の卓越年級群であると推定され、2007年当初の推定残存資源尾数も2億尾と3歳魚の資源尾数としては1995年以降最高である。

2005年級群（2歳魚）は、推定加入尾数が4億尾であり、これまでの漁況経過や調査船調査結果からも豊度は低いと判断され、資源尾数は少ない。

2006年級群（1歳魚）は、推定加入尾数が1億尾であり、これまでの漁況経過や調査船調査結果からも豊度は過去最低水準であると判断され、資源尾数は少ない。

2007年級群（0歳魚）は定置網などの各地漁業で漁獲されはじめている。調査船調査では、5月の黒潮-親潮移行域中層トロール幼魚調査（中央水研・北水研）による加入量指数は14であり、2005年：11、2006

年：5を上回り、2004年：17に近い高い値であった。6～7月の北西太平洋中層トロール資源調査（東北水研）による推定現存量は410億尾（暫定値）であり、過去の同調査における2004年級群：111億尾、2005年級群：6.2億尾、2006年級群：0.1億尾を上回り、2001年開始以降の同調査で最高であった。これらの調査船調査結果は年級群豊度をよく指標すると考えられている。発生後間もない現時点での評価は不確実ではあるが、これまで得られている情報からは2007年級群は1996、2004年級群のように加入量水準が高い可能性がある。

2. マサバ

(1) 来遊量

資源状態に記したとおり、0歳魚（2007年級群）の加入量水準は、情報が限られており不確実ではあるが、2005、2006年級群を上回り、比較的高いと考えられる。

1歳魚（2006年級群）の加入量水準は、2005年級を下回る水準と考えられ、予測期間における関東以北への来遊量は、前年をさらに下回ると考えられる。

2歳魚（2005年級群）の加入量水準は2001、2003年級群並みの低い水準であり、現在の残存資源尾数は5千万尾程度と考えられることから、来遊量は多かった前年2歳魚（前年同期資源尾数：8.4億尾）を下回ると考えられる。

3歳魚（2004年級群）の残存資源尾数は2.6億尾程度と3歳魚としては近年になく多いと考えられることから、来遊量は前年3歳魚を上回ると考えられる。

以上のことから本予測期間は2004年級群（3歳魚）が主体となる。これに2005年級群（2歳魚）、2006年級群（1歳魚）が混じるが少ない。期後半に2007年級群（0歳魚）が漁獲され、漁獲の主体になる可能性もあるが、0歳魚の加入量の見積もりは非常に不確実である。マサバ全体としては、多かった前年を下回ると考えられる。

伊豆諸島以西の海域では、サバ類に占める近年のマサバの割合は低く、漁場形成があっても不安定である。

(2) 漁期・漁場

常盤海域から犬吠周辺におけるまき網によるサバ類の1～6月の漁獲は、4月以降の操業自粛もあり、29,960トンと前年同期（81,968トン）を下回った。

千葉県以北沿岸の定置網による1～6月のサバ類の水揚量は2,686トンと前年同期（4,337トン）を下回ったものの近年では比較的高かった。

たもすくい、棒受網漁業（千葉県、神奈川県、静岡県船）の1～6月のマサバ水揚量は3,347トンと、前年同期（556トン）を上回り、1996年級群が2歳として漁獲された1998年以来9年ぶりに1000トンを上回って好漁となった。漁場は利島～大室だしが中心であった。

今漁期は、常盤海域以北ではまき網、定置網での漁獲が中心となる。すでに7月上旬に八戸沖でまき網の漁獲が始まっていること、三陸沿岸定置網にもまとまって入網していることから、魚群は東北海域に達していると考えられる。8～9月は三陸北部海域を中心に漁場が形成され、10月には三陸～常盤海域に漁場が広がる。11月は三陸～犬吠海域となるが、主漁場は常盤以南。12月には常盤～犬吠海域に漁場が形成され、犬吠海域が主漁場となる。道東海域は現在親潮の勢力が強く低水温状態にあるが、今後水温が17℃以上に昇温すれば漁場形成される可能性がある。

本予測期間中は、伊豆諸島以西の海域ではほとんど期待できない。

(3) 魚体

常盤から犬吠周辺では、1～3月は25～35cmの2、3歳魚が漁獲された。4月は21～30cmの1、2歳魚、5月は26～38cmの2、3歳魚、6月は32～35cmの3歳魚が漁獲された。年齢査定結果や体長組成の推移

などから、関東以北における本予測期間の年齢別尾叉長は、1 歳魚 25~28 cm、2 歳魚 27~32 cm、3 歳魚 32~38cm と考えられ、期後半に出現する 0 歳魚は例年の傾向から 19~25 cm と予測される。年齢査定結果によると各年級群の体長幅は広く重なり合っており、厳密な体長区分は困難である。なお、熊野灘以西の海域での成長はこれよりやや速いと考えられる。

(4) 資源管理

マサバの親魚量は 2004 年級群の高い加入により増加傾向にある。2007 年産卵期は 2004 年級群が 3 歳魚として活発に産卵した。産卵量は 2007 年 1~6 月でサバ類で 312 兆粒、マサバのみでも 251 兆粒と大きく増加、1982 年以来 15 年ぶりに 200 兆粒を超えた。しかし 2005、2006 年級群の加入量水準は低く、親魚量は今後減少すると考えられる。続く 2007 年級群は、現段階では不確実であるが、比較的豊度の高い年級であると期待され、2007 年級群を保護することにより親魚量の減少を一時的なものにとどめ、更なる増加につなげることができると期待される。現在マサバ太平洋系群の親魚量の回復を目指した資源回復計画が実行されている。親魚量の増加傾向を維持しマサバ資源の回復を図るため、若齢魚の保護を継続することが肝要である。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述の通り、0 歳魚（2007 年級群）はこれまで得られている情報からは加入量水準が高いと推定され、期後半に加入し、薩南以外では前年を上回る。1 歳魚（2006 年級群）および 2 歳魚（2005 年級群）は資源量水準が低いと推定され、前期までの漁況では、例年 1、2 歳魚が漁獲の主体となる熊野灘以西海域においても漁獲は少なかった。来遊量は、1 歳魚は前年同様に低い水準、2 歳魚は加入豊度の高い前年の 2 歳魚（2004 年級群）と比べることから前年を下回る。3 歳魚（2004 年級群）は、各地漁業の漁獲主体となっており、残存資源量は 3 歳魚としては高い水準にあると推定され、来遊量は前年を上回る。4 歳（2003 年級群）以上の残存資源量は少なく来遊量は少ない。以上のように 2004 年級群に続く 2005、2006 年級群の加入豊度は低く、全体では前年を下回る。

(2) 漁期・漁場

1~6 月のゴマサバ漁況は、伊豆諸島以西の海域では 3 歳魚（2004 年級群）の漁獲状況によって各海域で異なった。3 歳魚の来遊が多かった日向灘および熊野灘では好調であった前年を上回り、同様に薩南海域では好調であった前年を下回ったが平年を上回った。他の海域では前年を下回った。犬吠以北海域のまき網では、前年に引き続き 3 歳魚主体にマサバに混獲されたが操業自粛もあって漁獲量は前年の約 2 割であった。1~6 月の漁獲量は、薩南海域~紀伊水道外域は 2.2 万トン（前年同期実績 3.3 万トン）、熊野灘~伊豆諸島周辺海域は 3.0 万トン（同 3.1 万トン）、犬吠以北海域は 0.3 万トン（1.3 万トン）であった（漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本の種判別結果等からの推定値）。

熊野灘以西海域では、3 歳魚（2004 年級群）の資源水準が高いものの、主体となる 1 歳魚（2006 年級群）、2 歳魚（2005 年級群）が少ないため、期を通じて漁場が形成されるが低調となる。

伊豆諸島周辺海域では、3 歳魚（2004 年級群）の資源水準が高く、近年の主漁場である三宅島~銭洲周辺海域で期を通じて漁場が形成される。

犬吠以北海域では、近年、高水温傾向にあり、三陸以北へ索餌回遊するゴマサバが多くなっている。越冬後の 1 歳以上が 2001 年以降は三陸北部まで、2005、2006 年は道東海域まで来遊してまき網漁場を形成した。三陸以北海域では 3 歳魚がまき網で多獲されたことは過去に例が無いものの、7 月に入って資源量水準の高い 3 歳魚（2004 年級群）がすでに三陸北部のまき網で漁獲されており、今期も 3 歳魚主体に三陸北部海域まで来遊してマサバに混獲される。

(3) 魚体

体長組成の推移、年齢査定の結果から、今期の年齢別尾叉長は概ね次の通りである。0 歳魚（2007 年級群）：28 cm 以下、1 歳魚（2006 年級群）：25～33 cm、2 歳魚（2005 年級群）：29～35 cm、3 歳魚（2004 年級群）：30～37 cm、4 歳以上（2003 年級群以上）：36 cm 以上。伊豆諸島周辺以北海域では、熊野灘以西海域よりも若齢魚の体長はやや小さい。

熊野灘以西海域は、例年 1 歳魚が漁獲の主体になるが、今期は、1、2 歳魚の来遊量は少ないとみられることから、資源水準の高い 3 歳魚の漁獲物に占める割合が高い。伊豆諸島周辺海域および犬吠以北海域では資源水準の高い 3 歳魚が漁獲の主体になり、1、2 歳魚が混じる。いずれの海域も期後半には 0 歳魚も漁獲される。

※付記

東北海区サバ長期漁況予報の太平洋イワシ・アジ・サバ等長期漁海況予報への統合のお知らせ

これまで三陸沖でのサバ類を対象とした漁業に対応するため、毎年 10 月始めに東北海区サバ長期漁況予報を出して参りましたが、近年ではサバ資源の分布回遊範囲の縮小と対象魚群の若齢化によって漁期が早まり、10 月には三陸沖漁場が終盤となる状況になっています。

そのため、東北海区のサバの漁況予報は、現在、太平洋全体のサバ類の漁況予報として中央水研で出される太平洋イワシ・アジ・サバ等長期漁海況予報の 7 月の予報に統合することが適切であることから、今後は当該予報に東北海区におけるサバ類の漁況予報を統合することとして整理し、予報精度を維持・向上して参ります。

従いまして本年 10 月から東北海区サバ長期漁況予報は出されなくなりますのでご承知ください。

マアジ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2007(平成19)年8月～12月)

対象海域:北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業:まき網、定置網

対象魚群:0歳魚(2007(平成19)年級群)、1歳魚(2006(平成18)年級群)、2歳(2005(平成17)年級群)以上。年初に加齢。魚体は尾叉長。

1. 北薩～土佐湾(まき網、定置網)

(1) 来遊量:北薩～薩南では低水準の前年を上回る。日向灘～豊後水道西部では低準の前年並みか前年を下回る。豊後水道東部～土佐湾では低水準の前年を下回る。

(2) 魚体:19cm以下(0歳魚)が主体。豊後水道では20～24cm(1歳魚)も混じる。

2. 紀伊水道外域～熊野灘南部(まき網、定置網)

(1) 来遊量:紀伊水道外域西部では主体の0歳魚は前年を上回るが、1歳以上は前年を下回る。紀伊水道外域東部では高水準の前年を下回る。熊野灘南部では前年を下回る。

(2) 魚体:紀伊水道外域西部では10～19cm(0歳魚)と20～24cm(1歳魚)。紀伊水道外域東部では19cm以上(1歳以上)が主体。熊野灘南部では12～18cm(0歳魚)が主体で、11月以降は21cm以上(1歳以上)も混じる。

3. 熊野灘中北部(まき網、定置網)

(1) 来遊量:低水準の前年を上回る。

(2) 魚体:8～10月は20～24cm(1歳魚)主体、11～12月は14～18cm(0歳魚)主体。

4. 相模湾(定置網)

(1) 来遊量:前年を上回る。

(2) 魚体:10～19cm(0歳魚)主体で、8月は20～23cm(1歳魚)も来遊する。

漁況の経過(2007(平成19)年1月～7月)および今後の見通しについての説明

1. 資源状態:

資源量は1986(昭和61)年以降顕著に増大し、1990年代半ばは15万トンから16万トンと高水準であった。しかし1997(平成9)年から減少し、2001(平成13)年に増加したものの、2002(平成14)年には再び減少し、2004(平成16)年にかけてわずかに増加が見られたが、2005(平成17)年以降は減少が続いている。2006(平成18)年の資源量は9万8千トンと中位水準であり、近年の資源動向は減少傾向である。

2. 来遊量、漁期・漁場:

2005(平成17)年級群(2歳魚)は、例年の経過から紀伊水道外域東部に来遊が予測される。

2006(平成18)年級群(1歳魚)は、例年の経過から、今漁期を通して紀伊水道外域で、10月までは熊野灘中北部で漁獲の主体となると考えられる。この年級群の0歳魚としての漁況は、6月に豊後水道東部で、11月に熊野灘でややまとまって漁獲されたほかは低調に推移した。1歳魚となった今年1~6月は、紀伊水道外域西部では低調、紀伊水道外域東部では好調で、熊野灘中北部では低調であった前年を上回った。これらのことから今漁期の来遊量は、紀伊水道外域西部は前年を下回り、熊野灘中北部では低水準の前年並みと予測される。紀伊水道外域東部では前年が高水準であったのでそれには及ばないと予測される。

2007(平成19)年級群(0歳魚)は、北薩~紀伊水道外域西部、熊野灘南部、相模湾では今漁期を通して、熊野灘中北部では11月以降の漁獲の主体となると考えられる。九州南東沖における表層網による稚魚の採集数は低水準の前年を下回り、日向灘南部の大型定置網への0歳魚の入網は低水準の前年並みであった。6月までの漁況は、北薩~薩南海域では棒受網やまき網への混獲が低調の前年を上回り、日向灘~豊後水道、高知県海域では低調、紀伊水道外域西部の定置網は好調、潮岬附近~熊野灘南部の棒受網、定置網は低調であった。熊野灘中北部の定置網は前年を上回った模様で、相模湾の定置網は低調の前年を上回って1990年以降の平均並みであった。日向灘、相模湾では6月までの0歳魚の漁況と7~12月の漁況に正の相関が認められ、他の海域でも同様の関係があると考えられる。これらのことから今漁期の来遊量は、北薩~薩南では低水準の前年を上回り、日向灘~豊後水道西部では低水準の前年並みか前年を下回り、豊後水道東部~土佐湾では低水準の前年を下回る。また、紀伊水道外域西部では前年を上回り、熊野灘南部では前年を下回り、熊野灘中北部、相模湾では前年を上回ると予測される。

予測対象海域では周年漁場が形成される。

2006(平成18)年7~12月の主要港水揚量は鹿児島~高知は6,110トン、徳島と和歌山は1,978トン、三重と愛知は1,062トン、相模湾は204トンであった。2007(平成19)年1~6月は鹿児島~高知は4,778トンで前年同期の0.8倍、徳島と和歌山は1,592トンで0.9倍、三重と愛知は660トンで1.6倍、相模湾は1,410トンで0.9倍であった。

マイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2007(平成19)年8月～12月)

対象海域:北薩～道東

対象漁業:まき網、定置網、船曳網

対象魚群:0歳魚(2007(平成19)年級群)、1歳魚(2006(平成18)年級群)、2歳魚(2005(平成17)年級群)、3歳魚(2004(平成16)年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘(まき網、定置網)

(1) 来遊量:依然として低水準であるが、北薩～紀伊水道外域西部では前年を上回る。

紀伊水道外域東部～熊野灘では引き続き低水準で推移する。

(2) 漁期・漁場:期を通じて散発的ではあるが、0歳魚主体で漁況がまとまる可能性がある。

(3) 魚体:0歳魚(12～17cm)主体で、1歳魚(18～19cm)も漁獲対象になる。

2. 伊勢・三河湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量:依然として低水準。伊勢・三河湾並びに相模湾では前年を上回る。遠州灘～駿河湾では前年並み。

(2) 漁期・漁場:期を通じて散発的。

(3) 魚体:0歳魚(13～17cm、伊勢・三河湾では15cm以下)主体に1歳魚(17～19cm)が混じる。遠州灘～駿河湾では1歳魚(17～19cm)主体。

3. 房総～道東(まき網、定置網)

(1) 来遊量:漁獲の主体となる1歳魚は、前年同期を下回る。2歳魚も引き続き漁獲対象になる。12月以降0歳魚が未成魚越冬群として加わる。

(2) 漁期・漁場:主漁場は8～10月には常磐海域～三陸南部、11月には常磐海域以南、12月には犬吠埼沖となる。三陸北部以北、道東海域への来遊は依然として低水準。

(3) 魚体:1歳魚(17～19cm)主体で、期の前半には2歳魚(20～21cm)も混じる。12月以降0歳魚(12～13cm)がカタクチイワシに混獲される。

漁況の経過(2007(平成19)年4月～6月)および今後の見通しについての説明

1. 資源状態:

マイワシ太平洋系群の資源量は1994(平成6)年に100万トンを下回り、その後1999(平成11)年までは70万～90万トン台で推移したが、その後再び減少傾向となった。2002(平成14)年以降は10万トン台の低水準にあると推定された。近年の動向としては横ばいである。

2004(平成16)年級群は、2005(平成17)年の間に実施された沖合分布調査で1歳魚としての採集がほとんど見られなかったことから、分布量は極めて少ないと考えられた。2006(平成18)年並びに2007(平成19)年明け以降の漁獲尾数も少なかったことから、3歳魚としての資源量水準は漁獲対象にならないほど低いと考えられる。

2005(平成17)年級群は、2006(平成18)年6～8月における房総～鹿島灘海域での活発な漁獲の主体となり、1歳魚としての漁獲量は前年を大きく上回った。一方、8～9月の北辰丸による表層流網調査(釧路水試)、9～10月の北鳳丸による表中層トロール調査(東北水研八戸)では高い分布密度が認められなかったことから、沖合域の分布密度は高くないと推定された。房総～鹿島灘海域においては、2007(平成19)年1～3月にも活発な漁獲の対象となり、その後も引き続き漁獲物に出現していることから、2歳魚としての資源量水準は前年を上回ると考えられる。

2006（平成18）年級群は、2006（平成18）年6～7月に行われた北鳳丸・青海丸による表中層トロール調査（東北水研八戸）並びに北辰丸による表層流網調査（釧路水試）では、0歳魚としての沖合域での分布は認められなかった。その後、9月並びに10～11月に行われた北辰丸による表層流網調査（釧路水試）では分布が見られ、近年2年の皆無より上回ったが、9～10月の北鳳丸による表中層トロール調査（東北水研八戸）での分布密度は前年を大きく下回った。2007（平成19）年2月の俊鷹丸並びに開洋丸による現存量調査（中央水研）での分布密度も前年を大きく下回った。これらのことから、1歳魚としての資源量水準は前年を下回ると考えられる。

2007（平成19）年産卵期（前年10月から当年6月までの暫定値）における産卵量は約150兆粒であり、前年の38兆粒を大きく上回り、2005（平成17）年産卵期（101兆粒）も上回った。シラス漁況も前年を上回り好調に推移した海域が多かった。5月の北鳳丸による幼稚魚調査（中央水研）での加入量指数は29であり、2005（平成17）年（28）と同程度であった。2007（平成19）年6～7月に行われた北鳳丸・青海丸による表中層トロール調査（東北水研八戸）でも、2005（平成17）年と同程度の分布量が認められた。これらのことから現時点では、2007（平成19）年級群の加入量水準は近年において比較的加入量が多かった2005（平成17）年級群と同程度と考えられるが、今後、秋季の表中層トロール調査（東北水研八戸・中央水研）、未成魚越冬群調査（中央水研）等の結果により判断していくことになる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体：

北薩～熊野灘：前期（4～6月）の主要水揚量は、前年同期の6倍以上となり、近年5年では最高であった。特に鹿児島県と宮崎県並びに愛媛県の漁獲が急増した。一方、紀伊水道外域～熊野灘では依然として低調であった。北薩～紀伊水道外域西部では、今期（8～12月）の来遊量は前年を上回ると予測される。一方、紀伊水道外域東部～熊野灘では、来遊量は低水準で推移すると予測される。体長組成の推移等から、前期の漁獲は全体として0・1歳魚主体であり、その中で熊野灘のまき網では2歳魚（18～20cm）が主体、定置網では1歳魚（15～18cm）が主体であったが、その他の海域では0歳魚（15cm未満）が主体であった。今期（8～12月）は0歳魚（12～17cm）主体で、1歳魚（18～19cm）も漁獲対象になると予測される。

伊勢・三河湾～相模湾：前期（4～6月）の主要水揚量は、依然として低水準ではあるものの、全体としては前年同期を上回った。今期（8～12月）も、期を通じて来遊量は低水準であるものの、前年を上回る（伊勢・三河湾並びに相模湾）もしくは前年並み（遠州灘～駿河湾）と考えられる。体長組成の推移等から、前期の漁獲は1歳魚（15～16cm）が主体で、後半には0歳魚（13cm未満）が混じるようになった。今期（8～12月）は、0歳魚（13～17cm、伊勢・三河湾では15cm以下）主体に1歳魚（17～19cm）が混じると考えられる。遠州灘～駿河湾では1歳魚主体（17～19cm）と考えられる。

房総～道東：前期（4～6月）の主要水揚量は、前年同期を下回った。前年は6月に9千トン以上の漁獲が見られたが、今年は4千トン台にとどまっていたことによる。漁況と、沖合域の分布調査結果も考慮すると、今期（8～12月）の来遊量水準は、漁獲の主体となる1歳魚の資源量水準が前年を下回ると考えられることから、前年同期を下回ると予測される。一方、2歳魚は引き続き漁獲対象になると考えられる。主漁場は8～10月には常磐海域～三陸南部、11月には常磐海域以南、12月には犬吠埼沖となり、三陸北部以北、道東海域への来遊は依然として低水準と予測される。体長組成の推移等から、前期（4～6月）の漁獲の主体は1歳魚（15～17cm）で、2歳魚（19～20cm）も引き続き漁獲された。今期（8～12月）も1歳魚（17～19cm）主体と予測されるが、期の前半には2歳魚（20～21cm）も混じると考えられる。12月以降0歳魚（12～13cm）がカタクチイワシに混獲されると考えられる。

カタクチイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し (2007(平成 19)年 8 月～12 月)

対象海域：北薩～道東。

対象漁業：まき網、定置網、船曳網。

対象魚群：0 歳魚 (2007(平成 19)年級群)、1 歳魚 (2006(平成 18)年級群)、および 2 歳魚 (2005(平成 17)年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 西薩～常磐南部のシラス(船曳網)

(1) 来遊量：西薩、志布志湾では前年を上回る。日向灘では前年を上回る。豊後水道では前年並みか前年を上回る。伊勢湾～駿河湾では前年並み。相模湾では前年を下回る。常磐南部では不漁で前年を下回る。

(2) 漁期：全期間。

2. 北薩～紀伊水道外域(まき網、定置網)

(1) 来遊量：北薩・薩南海域では好調であった前年を上回る。日向灘では前年を上回る。豊後水道では前年並みか前年を上回る。土佐湾から紀伊水道外域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期：全期間。

(3) 魚体：日向灘は 12cm 以下の 1 歳魚と 0 歳魚、北薩、薩南、豊後水道は 10cm 以下の 0 歳魚主体。

3. 伊勢湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量：伊勢湾～伊豆半島東岸では好漁であった前年並み。相模湾では前年並みか前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：伊勢・三河湾、渥美外海、駿河湾では全期間。相模湾は 8～9 月中心。

(3) 魚体：伊勢・三河湾、渥美外海は 5～10cm(0 歳魚)主体に 10～13cm(1 歳魚)が混じる。駿河湾～相模湾は 10～13cm(1 歳魚)主体。

4. 房総～道東(まき網、定置網)

(1) 来遊量：前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：1 そうまき漁場は 11 月下旬～12 月に三陸南部から順次常磐北部、常磐南部、鹿島灘、犬吠埼周辺に形成される。道東のまき網は 9～10 月。仙台湾～三陸の定置網は全期間。常磐の小あぐり・房総沿岸の 2 そうまきは全期間。

(3) 魚体：常磐の小あぐり、房総の 2 そうまきは 7～11cm 台の 0 歳魚主体。1 そうまきは 12～13cm 台の 1 歳魚主体。三陸の定置では 12cm 前後の 1 歳魚主体、道東のまき網では 8～14cm の 0～2 歳魚。

漁況の経過(2007(平成 19)年 1 月～6 月)および今後の見通しについての説明

1. 資源状態：

カタクチイワシ太平洋系群の資源量推定値は 1998(平成 10)年から 2006(平成 18)年まで 90 万～150 万トンで推移している。水準は過去 20 年では高位、経過は 5 年間で減少傾向にある。本系群は漁場が形成され

る沿岸だけでなく黒潮親潮移行域まで広く分布している。

2005(平成17)年級群は、2005年6～7月の北西太平洋沖合域の表層トロール調査(東北水研)による体長10cm未満の分布量で2004(平成16)年級群を上回った一方で翌2006年6～7月の調査では体長10cm以上の分布量が2001年以降で最低水準であった。しかし2005年の房総沿岸のジャミセグロ漁況が好漁であったこと、2005年9～10月の道東まき網漁獲物、同年9～10月の道東～三陸沖の中層トロール調査(東北水研)でも0歳魚時点で採集されていたこと、2006年4～6月の房総以北での漁況および9～10月の道東まき網が2001年以降で中程度であったことから、近年の中では中水準であったと考えられる。

2006(平成18)年級群は、常磐・房総沿岸では2006年10～11月に0歳魚としての漁獲が少なく、道東海域では9～10月に0歳魚として漁獲されたが前年には及ばなかった。また2007年2月に常磐・三陸沖で行われた中層トロール調査(中央水研)では、調査時の海況の影響もあるがカタクチイワシの推定分布密度は2002年以降で最も低く、2006(平成18)年級群と思われる小型魚も少なかった。また2007年6～7月の北西太平洋におけるトロール調査で10cm以上のカタクチイワシの分布量が2001年以降で最低であったことから、近年の中では低水準であると考えられる。

2007(平成19)年級群は、1～6月の本州太平洋岸における産卵量が6,065兆粒であり前年同期(4,307兆粒)をやや上回り、過去10年間の同期の平均(7,073兆粒)をやや下回る水準であったが、紀伊水道を除く太平洋岸の各地において1～6月のシラスは前年並みか前年を上回る漁況で、東日本でのシラスは総じて1997年以降で最高の漁獲量となった。また6～7月の北西太平洋におけるトロール調査で10cm未満のカタクチイワシの分布量が2001年以降で最高であったことから、近年の中では中～高水準であると考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体：

(1) 西薩～常磐南部のシラス(船曳網)

西薩・志布志湾では春漁が過去5年平均を上回り好調であった。日向灘における黒潮の変動予測は不漁になる条件ではなく、6～7月の中型まき網の漁場も沿岸域であるため、日向灘沿岸への加入条件が良いと推察される。豊後水道(佐伯湾)では親魚(2006(平成18)年級群)の漁が低調であり、前年のシラス漁獲量との相関関係も考慮に入れると不漁の前年並みか上回る程度と予測される。土佐湾では下半期のシラス漁は11～12月の漁で大きく左右されるため予測が困難である。伊勢湾および渥美外海では未成魚が多く、シラスとして豊漁であった春生まれの2007(平成19)年級群が産卵に加わるのが予測期間の後半と考えられるため、来遊は前年および過去10年平均並みと考えられる。遠州灘から駿河湾では6月下旬～7月中旬の漁況が低調であるものの、卵・仔魚の出現状況と海況予測から、過去5年平均を上回り前年並みと考えられる。相模湾では卵の分布量から、好漁であった前年を下回り過去10年平均並みと推測される。常磐南部では例年の盛漁期である8～9月の黒潮流路がB型と予測されることから不漁で前年を下回ると考えられる。

(2) 北薩～紀伊水道外域(まき網、定置網)

北薩および薩南海域では、周辺海域でのバッチ網漁業が好調であることから、好調だった前年を上回ると考えられる。日向灘では、今期は春季に大型群の来遊が少なく12cm未満の小型群主体で5～8月が盛漁期となるパターンであると推定されるため、5～6月の漁況経過から前年を上回ると考えられる。豊後水道

では1歳魚(2006(平成18)年級群)が前年の1歳魚を下回り、また春シラスの漁況から0歳魚(2007(平成19)年級群)が前年の0歳魚を上回ると考えられるため、総じて前年並みか前年を上回る程度と考えられる。土佐湾から紀伊水道外域では未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではないため、まとまった漁獲は無いと考えられる。

(3) 伊勢湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

伊勢湾および渥美外海では、今後の漁獲の主体となる0歳魚(体長5～10cm)がパッチ網漁獲物中に高い割合で見られ、春シラスの漁獲量も平年を大きく上回ったことから過去10年平均を上回り好漁であった前年並みとなると予測される。駿河湾～伊豆半島東岸では3月以降の伊豆東岸定置網、4月以降のまき網ともに過去5年平均を上回っていることから、比較的好漁であった前年並みと予測される。相模湾では上半期の漁況経過から前年並みか前年を下回ると予測される。

(4) 房総～道東(まき網、定置網)

2005(平成17)年級群は主たる漁獲対象とはならない。2006(平成18)年級群は2005(平成17)年級群を下回り近年の中では低水準にあると推定されるが、北部太平洋区まき網による本年4～6月の漁獲物は1歳魚(2006(平成18)年級群)と2歳魚(2005(平成17)年級群)半々で前年同期の176%の漁獲があった。しかし、今後の漁獲の主体となる2006(平成18)年級群は沖合での分布が少ないことから、常磐・房総海域における予測期間中の漁獲は前年並みか前年を下回ると推測される。

常磐・房総海域における1そうまきの主漁場は、1～3月前半は常磐南部から犬吠埼海域に、その後6月まで犬吠埼周辺に形成された。近年の推移から、1そうまきの漁場は8月以降同海域では形成されず、南下期は11月下旬～12月に三陸南部から順次常磐北部、常磐南部、鹿島灘、犬吠埼周辺に形成されると考えられる。1そうまきでは1歳魚(2006(平成18)年級群)が漁獲の主体となり、常磐の小あぐり、房総沿岸の2そうまきでは0歳魚(2007(平成19)年級群)および1歳魚(2006(平成18)年級群)が主体となる。魚体サイズは6月現在の漁獲物の体長にその後の成長を加味して推測した。

宮城県における4～6月までの漁獲量は、定置網を主体に2,508トンで前年同期の34%であった。体長組成のモードは4月上・中旬で9～10cm、4月下旬から5月中旬で12～13cm、5月下旬で10～10.5cmと12cm、6月は12cm主体であった。

渡島の定置網の漁獲量は4～6月で1,020トンであり、前年(1,449トン)を下回った。釧路水試が6月26日～7月5日に道東～三陸沖太平洋で北辰丸により実施した流し網調査では、CPUEは1,668.7尾/回で前年(897.9尾/回)を上回り、1994年以降で5番目に高い値であった。しかし同調査における魚体は9.5～14.5cm台で13cm台が主体で、秋季に漁獲の主体となる2006(平成18)年級群の資源量は2005(平成17)年級群より低く、また沖合での分布も少ないことから、夏季以降の道東海域へのカタクチイワシの来遊量は前年を大きく下回ると考えられる。

ウルメイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2007(平成19)年8月～12月)

対象海域:北薩～熊野灘

対象漁業:まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群:0歳魚(2006(平成18)年秋～2007(平成19)年生まれ)及び1歳魚(2006(平成18)年夏以前生まれ)。魚体は被鱗体長。

- (1) 来遊量:北薩～薩南では前年および過去5年平均を上回る。日向灘では高水準の前年並みで過去5年平均を上回る。豊後水道西部では高水準の前年並みか前年を上回る。豊後水道東部では前年並み。宿毛湾～土佐湾は高水準の前年並みか前年を上回る。紀伊水道外域西部では前年並み。紀伊水道外域東部～熊野灘南部では前年を上回り、過去10年平均並み。熊野灘中北部では前年を上回る。
- (2) 漁期:土佐湾の多鈎釣は11月から。他は全期間。
- (3) 魚体:6～20cmの0歳魚が主体。8月までは20～23cmの1歳魚も来遊する。

漁況の経過(2007(平成19)年1月～7月)および今後の見通しについての説明

1. 資源状態:

資源量の指標となる産卵量が過去22年で最多であるので、資源水準は高位、動向は最近5年の推移から増加傾向にある。現在の漁獲は資源に大きな影響を与えていないと考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場:

北薩～薩南では産卵親魚の来遊が好調で、7月中旬からまき網で0歳魚が好漁であった。日向灘では年間の来遊量の指標となっている1月の漁獲量が好漁の前年を上回った。豊後水道西部では5～6月の0歳魚の漁況が高水準の前年並みであった。高知県の定置網への0歳魚の入網は好調であった。紀伊水道内外域東部では0歳魚漁が前年及び平年を上回り、潮岬付近の0歳魚漁は不漁の前年を上回ったものの平年を下回った。潮岬沖の黒潮はやや離岸基調で推移し、紀伊水道外域東部～熊野灘南部の来遊条件は良くないと予測される。熊野灘中北部では春季の0歳魚の定置網漁は前年を上回った。

2006(平成18)年7～12月の主要港水揚量は12,563トンであった。2007(平成19)年1～6月は9,609トンで前年同期の1.3倍であった。